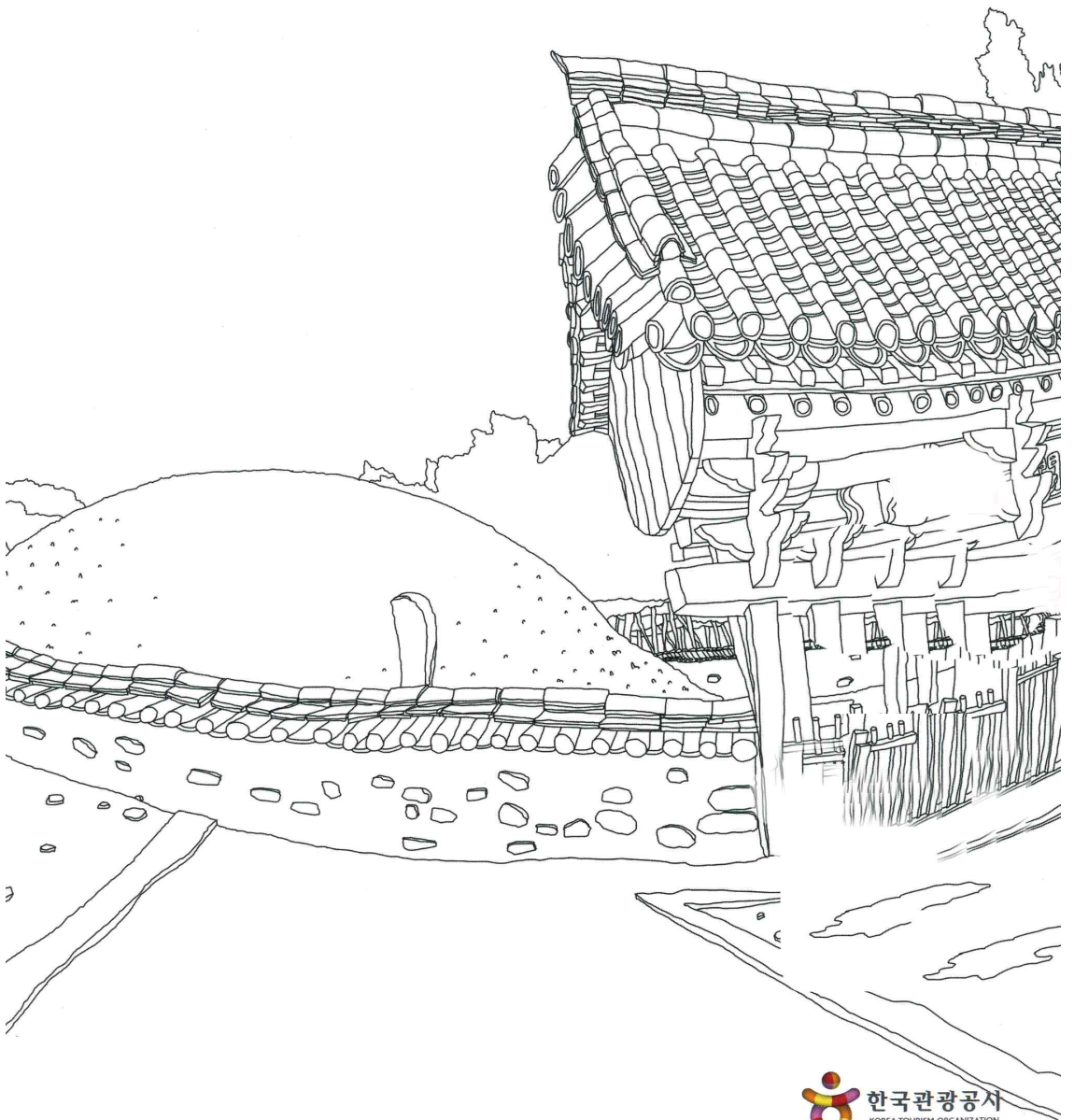


国立慶州博物館-新羅歷史館

1. 新羅歷史館 1 室
2. 新羅歷史館 2 室
3. 新羅歷史館 3 室
4. 新羅歷史館 4 室





ここは、慶州国立博物館の最初の展示室です。この部屋は先史時代、つまり新羅ができるはるかに以前に住んでいたこの土地の人々が使った石器と土器が展示されています。これらの変遷を調べると、当時の生活像がわかります。例えば、新石器時代の磨製石器は、農耕の始まりを知らせてくれます。また土器を見ると、刈り取った穀物を料理したり、保存したことが分かります。この展示室の中央に置かれているとがった底の土器は、韓国の新石器時代を代表する遺物です。土器は、全世界を問わず人類最初の芸術品と言えます。それだけ、装飾にも細心な精魂が込められています。韓国の新石器時代の土器は、クシでつけたような短い模様があり、櫛目文土器と言います。日本でも、新石器時代に縄で紋を入れた縄文土器が作られましたね。青銅器時代には、道具がさらに精巧で多様化して、暮らしに余裕がでてきます。本格的な農作業が可能になると、食生活はより一層多様化し、穀物の保存もするようになりました。そこで、さらに丈夫で実用的な土器を作るようになったのです。この時期の土器は底が平らで模様がなく、使い道に合わせて色々な形をしているのが特徴です。日本の縄文土器が、弥生土器に変化したのと似た進化過程を経たと言えるでしょう。



[ガイド] では、韓国の銅劍を見てみましょう。この展示室には、韓国の青銅器時代の遺物があります。特に、この銅劍がその代表的な遺物です。まず、左側に展示されたヴァイオリン形の劍をご覧ください。この劍は、初期青銅器時代に韓半島の北側の中国で作られたものです。

[観覧客] じゃあ、この銅劍は中国から来たということですね。

[ガイド] そうではありません。青銅器文化は、北側の大陸でまず発達し、その後韓半島の南側と日本に伝えられたというのが事実でしょう。ですが、この銅劍は中国ではなく韓半島最初の

国、古朝鮮で作られたものです。本体と柄が別々に組み立てられているという点で、一体型の中国の銅劍とは違いますね。ご覧ください。刃の先端部分に、柄に刺すためにとがらせた部分があるでしょう？

[観覧客] そうですね。ところでこの劍ですが、刃の形が独特で実用的じゃないように思います。

[ガイド] この刀は、実際に何かを切るためのものではありません。当時の権力者が、力を誇示するために身に着けていたものなのです。そのため、デザイン重視になっています。実用的な銅劍は、青銅器後期に作られました。右側に置かれた劍がそうです。刀が直線的で鋭利なこれらの劍は九州地方に伝えられ、日本の青銅器文化に影響を与えたと言われています。

では、本格的に新羅時代の遺物を見てみましょう。皆さんをお迎えするこの小さい人形は、「土偶」です。土をこねて人や動物、生活に使う道具を作りました。日本でも、縄文時代と古墳時代にたくさんの土偶が作られたんですよ。日本の土偶と新羅の土偶は、人の表情や体の表現が単純で抽象的という点で似ています。特に、新羅の土偶は勇ましくてユニークな姿をしているのが特徴です。中央で輪になった土偶を見て下さい！パーティーなのか、楽しく踊っているみたいですね。また、会話をしているような二人の男の土偶はどうですか？何か陰謀を企てているように陰湿で凶悪に見えませんか。こんな色んな姿のおかげで、土偶を見るとどんな道具で農作業をし、どんな楽器を演奏したのか、またどんな家畜をたくさん飼っていたのかなど、新羅の人々の日常を知ることができます。また土偶は、一般的に死んだ人と一緒にお墓に埋めるために作られました。墓の中で日常生活を再現しておくことによって、死んだ人の魂があの世界でもこの世と同じような生活ができるようにと思ったのでしょうか。





展示室の出口に置かれたこの壺は、展示室の入口でご覧になった「土偶」を肩に付け、立体的な装飾になっていて独特ですね。新羅の土偶は独立した形でも作られました。先ほどご覧になったものと同じように、この壺に付いている多くの土偶も、新羅の人々の生活を証明していますね。まず、中に座っている人の形をした土偶を見て下さい。日本の琴に似た韓国の伝統楽器を演奏しています。あ！演奏者の右側には、愛し合う男女も見えますね。男女の性行為の場面や性器が強調されたものは、先史時代の頃から世界中で愛用された素材でした。日本の縄文時代の土偶も、女性の胸や妊娠したお腹を強調したものが多いですね。これは全部「多産」と「豊かさ」の祈りが込められています。新羅でもこういう土偶を墓に埋めて、死者の魂が子孫を繁栄させることを祈ったのでしょう。壺に動物の土偶がたくさんついているのも、これと同じ理由からです。



では、新羅千年の宝物中の宝物、金冠をご覧にいれましょう。黄金でぎっしり埋まったこの展示室さえも圧倒する金冠は、新羅の代表的な古墳の天馬塚(チョンマチョン)から出土されました。強力な王権を誇った国だけに、新羅では多くの金冠が作られました。中でもこの天馬塚金冠は、新羅の最高傑作と呼ばれているそうです。一番厚い金版が使われ、華麗な装飾も多いためでしょう。新羅の金冠には、華やかな装飾の分、豊かな意味がこめられています。金縁の上にそびえた木の枝の形をした金版は、空とつながった木で、王様と神をつないでくれる役割を果たす宇宙樹木を真似て作られました。枝についた丸い黄金装飾は、生い茂った木の葉を表現しています。新羅が多くの子孫を作り、さらに繁栄するようにという願いが込められてい

ます。また、日本の三神器の一つの勾玉も見えますね。この王冠では勾玉は実を意味するのですが、これもやはり国の繁栄を祈るという意味が込められています。この金冠をかぶって玉座に座っている新羅王の姿を、一度想像してみてください。その威厳に、思わず頭が下がってしまいそうですね。王冠が重くて、王様の首が痛くならないだろうか心配になります。しかし、お墓に入れられた王冠はもっと大きくて重く華やかなものでした。実際に、この天馬塚金冠の場合、死んだ王様の顔全体を覆ったままで発見されました。生きている時も王冠をかぶっていたのかは、いまだに謎のままです。



天馬塚に横たわっていた王様は、ただ金冠だけをかぶっていたわけではありません。太い黄金の耳飾りに洗練されたデザインの黄金の首飾り、黄金の指輪に金銅製の履き物まで！ 黄金を着ていたも同然だったんですよ。その多くの装身具の中でも、金冠と同じくらい華やかなのが、今皆さんが見ている金の帯なんです。この腰帯は、服が下がらないように押さえる実用的なものではありません。王様の権威を表わすために、革やシルク製の腰帯に付けて使う装身具だったのです。新羅の王族と貴族は、官服の上にどんな腰帯をつけるかによって、自分の力を誇示したそうです。どんな材質でどれくらい華やかな腰帯をつけるのかが、自分の身分を表すのです。同じ服を着ていても、どんな帯を重ねるかによってその人の品格が違って見えるようになります。富と権力の象徴であっただけに、この腰帯の装飾は相当なものです。腰を覆う部分は、薄い金版を二つに切って金糸で結んであります。その上には、丸い黄金装飾もきめこまかく付けられています。下に垂れた紐は、この腰帯をより一層引き立たせています。ちょっと変わった点は、この短い金の紐の先に日常品を真似て作った装飾があるということです。日常生活に必要な色々な道具をぶら下げて生活する北方遊牧民族の風習から由来したもので、それぞれの装飾には意味があります。例えば、編みである袋は健康を祈り、魚は豊かさを意味しています。

こちらにある黄金の遺物は、5世紀から6世紀前半、新羅黄金文化の全盛期に作られたものです。空気さえも金色に染まるかのように、この展示室を圧倒しているこれらの黄金の遺物。そのため、『日本書紀』には新羅が「まぶしい金銀の国」と記録されるほどだったんですよ。マルコポーロが黄金の島「ジパング」と呼んだ日本人々は、逆に新羅を黄金の帝国と呼んだそうです。新羅の黄金文化がどれくらい繁栄していたか、十分に分かりますね。このような名声は、新羅の優れた金属工芸術によって、より一層光を放つことになります。金冠の向い側に置かれた金の帽子は、金版にうすく浮かび上がる小さい紋が細かく刻まれています。金糸で編んだような繊細な外観が自慢の一品です。こういう帽子や冠をより一層華やかにしたのが、そばに置かれた金版装飾でしょう。この装飾は、蝶が空に向かって羽を伸ばした姿が描写されています。よく見ていただきたいのは、金糸でこまかく通した丸い黄金装飾です。以前ご覧になった金冠にもたくさんありましたね。このような黄金の装飾で頭を美しく飾った王様が歩いている姿を一度想像してみてください。歩くたびに揺れる装飾が日の光に反射して黄金の光を放つ姿は、壮観だったことでしょう。耳飾りの形をした物も、冠の装飾です。金のガラス玉などの装飾や、太い輪に金糸をつけてその下に青いガラスをつけた装飾もあります。こういった装飾は、先ほど見た腰帯にも使われていました。このように、新羅の王族と貴族は儀式だけでなく、日常でも広く金製品を使ったそうです。慶州の墓にある金の量は、東アジアだけでなく全世界合わせても肩を並べる国が殆どないと言われています。





[ガイド] 東京国立博物館で、これらに似たガラスのコップをご覧になったことがありますか。このようなガラス製品は、5～6世紀に新羅と日本で使われていたのですが、両国でこのような器を作ることができるガラス加工技術はなかったそうです。それでは、これらはどうして新羅と日本の古墳で発見されたのでしょうか。

[観覧客] 中国から来たんじゃないですか。韓国や日本は、当時中国から先進文物をたくさん受け入れていましたし。

[ガイド] 半分ぐらいは当たっていますね。この器は中国から入って来たのですが、中国で作られたわけではないのです。器の形態やガラスの成分が中国のものとは違って、むしろローマガラスに似ていますね。地中海地方で作られて、ユーラシア北方草原地帯を貫くシルクロードを通じて新羅と日本に輸入されたものだと推定されています。

[観覧客] ローマからここまでだったら、今でも飛行機で10時間を越えるでしょう。その昔にそんな遠いところから！ わあ、すごいですね。

[ガイド] はい、当時新羅は外国との交易がかなり活発だったんですよ。このガラスのコップが入ってきた当時は、相当な国力を持っていたということでしょう。それでも、東アジアの端までガラスを運んでくるというのはそう簡単ではなかっただけに、当時この器はとても高価なぜいたく品だったでしょうね。金よりも高く、上流階級の人だけが使えたものじゃないでしょうか。



奥に単独で置かれていても、目を引くこの華やかな遺物は、約 1500 年前に作られた装飾宝剣です。見た感じ、エキゾチックですね。さやの独特な形も、表面にある波模様や太極模様なども韓国的なものとは距離があります。また、色とりどりに施されている宝石とガラスも、新羅では発見されていないものだそうです。この宝剣も、やはり先ほどのガラスコップのように、シルクロードを通じて新羅に入ってきた外来物ですね。ところで、この宝剣の出どころは長く謎でした。このように金と多彩色の宝石を調和させた製作技法が、ドイツから西シベリアに至るまで広い地域で発見されていますが、正確にどの地域で作られたのかは分かりませんでした。しかし、37 年間の精密な研究の末、さらに正確な推理が可能になりましたが、それは新しく明らかになった二つの事実のおかげでした。一つ目は、さやの中に隠れていた鉄剣が、主に中央アジアで作られた両刀短剣だということでした。二つ目は、鉄剣の右側突出部の赤い宝石が、東ヨーロッパで採掘される石榴石だということでした。それで、この剣は中央アジアと東ヨーロッパ商人の合同作品ではないかと推測されているそうです。この宝剣の

発掘には、ヒヤリとするようなエピソードがあります。この宝剣が発見された墓は、1973 年に慶州の代表的な古墳公園の進入路工事をしていた際に、偶然発見されました。この宝剣は、危うくアスファルトの下に永遠に埋められるところだったんです。命拾いをしたというわけですね。



この碑石は、6世紀に新羅に仏教を取り入れるために命を捧げたイ・チャドン(異次頓)という人物を賛えるために作られました。新羅に仏教が広まるまでは、多くの困難がありました。地方貴族が、支持していた土俗信仰を守るために仏教を圧迫したためです。日本でも仏教が伝来された時、これを支持する蘇氏一族と土俗信仰を信じる物部氏との間で激烈な争いが起きたようです。 仏教を受け入れようとした王様の意を敬ったイ・チャドンは、地方貴族に対抗して寺院を建て、その罪で処刑されました。彼は、死ぬ瞬間に仏の奇跡を予言し、命を捧げたと言います。 そんな奇跡の瞬間が、碑石の正面に彫刻されています。そ

れでは、彫刻を一度調べてみましょう。死の瞬間にも恐れることなく頭を差し出しているイ・チャドンの姿を見て下さい! 彼の首からは、赤い血でない白い血が数十メートルまで吹き出したようです。彼の周囲を見てみましょうか。足下の波紋は、彼の死を悲しんで揺れる土地を描写したものです。空からは花の雨が降って、彼の死を崇高さを知らせています。 イ・チャドンの殉教精神に感服した民衆は、自然に仏教を信じるようになりました。それではじめて、新羅に仏教が取り入れられるようになったのです。



こちらの美術館の1階は、全て仏教美術品で飾られています。新羅が仏教の力で韓半島を統一した国だけあって、仏教は新羅の美術に圧倒的な影響を及ぼしました。 仏教が伝来し、ばく大な量の仏像と仏画が作られた日本の飛鳥時代と肩を並べるだけのことはありますね。 それでは、皆さんを喜んで迎えてくれる「新羅人の微笑」からご覧にいきましょう。慶州市内のあちこちで、この顔に会うことができます。手のひらよりも小さい壊れた彫刻像が、新羅を

代表する遺物になった理由は何でしょうか。 先ず、この彫刻像が「人面紋」の軒丸瓦であるためです。軒丸瓦は、円筒形列をなしてのせられた瓦の端を飾る装飾用瓦です。普通はレンゲ紋の装飾が大部分なので、人面紋はとても珍しい上、この新羅女性の顔が自然で敬服するほどの美しさです。それでこの瓦を慶州のマスコットにしたのでしょう。どうですか。微笑を浮かべている女性の顔が、モナリザの微笑に比べられるだけのことはあるでしょう。 慶州の古物商にあったこの神秘的な微笑を初めて発見したのは、当時韓国に住んでいた日本人医師の田中タカノブでした。田中さんはこの瓦を大事に保管し、1940年代に日本へ帰国する際に持って帰りました。その後、30年間韓国から姿を消したこの軒丸瓦を記憶していた当時の慶州博物館長は、うわさをたよりに田中さんを探し出します。そしてこの軒丸瓦は1972年に劇的に韓国へと戻ってきたのです。一度海外に出た遺物が本国に戻るといのは、世界どこでも非常にまれなことですね。美しい遺物を近くで見たいという心はみんな同じですからね。ですが、他国の文化遺産の価値を尊重する田中さんのおかげで、瓦は故郷に戻る大事な機会を得ることができたのです。この瓦がより一層光って見えるのも、こういった心のおかげじゃないでしょうか。



ここでご覧になれる四枚の金属版は、慶州の風景でご覧になった高い塔の中心柱の下で発見された物です。これは本来ちょうつがいに連結された金属箱ですが、今はひろげた状態です。それでは、この箱は何の用途で作られたのでしょうか。はい。この箱は仏様の舍利を奉った舍利箱なのです。仏様の体から出た舍利は、全世界の立派な寺院に分けられて保管されましたが、新羅にも五ヶ所があったそうです。その中の一つが、この箱が発見された黄龍寺ですね。この箱をよく見ると、一番右側の門の形の版を除いた三枚にぎっしりと書かれてある文字が見えると思います。この文字を「刹柱本記」と言います。「刹柱本記」というのは、文字どおり木塔の中心柱の下で発見された歴史記録という意味ですね。この舍利箱の価値をより一層輝かせてくれるのは、まさにこの文字だということです。この舍利箱が発見された塔は9階の高さで、高さが何と80mに達する新羅の代表的な建築物でした。しかし残念なことに1238年モンゴルの侵略で焼失しました。ですが、この金属版に「いつ誰がどんな理由で塔を建てて修理したのか」が詳細に書かれているので、現在もこの塔に関する多くの情報が分かっています。このように、この舍利箱は宗教的意味だけでなく歴史的な価値まで持った貴重な遺物なのです。



では、1300年前の慶州の景色を見物してみましよう。新羅の首都・慶州は、8世紀にコンスタンチヌーブル、中国の首都・長安、バグダッドとともに世界4大都市と呼ばれる程栄えました。では、何が一番最初に目につきますか。はい、そうです。道が碁盤の目のように整備されていますね。その道に沿って整然と立ち並んだ家屋も見えます。家屋の軒のおかげで、傘がなくても雨に濡れずに歩くことができるという話まであったそうです。よく整備された計画都市だったという点で日本の古都・京都と似ています。 それでは、次は首都・慶州の主人公である王宮を見ましよう。下方の中央を占めている建物が、王宮です。南は川に挟まれているのが見えますか。日本の皇居周辺が大きな堀で覆われているように、韓国の王宮は川が自然の堀の役割になるように作られているのが特徴です。その上、日本に劣らず韓国でも風水地理を重要視しますが、慶州のように北側は山を、南側は川に挟まれた土地は最高の土地だと考えられ、こちらに王宮を作ったのです。 それでは、右側に一つだけそびえている建物は何でしょうか。はい、そうです。新羅最大の寺に作った新羅最大の塔です。新羅にはこちらの他にも寺が本当に多かったそうです。仏が国を守ると信じたので、王の名で寺をたくさん作ったのです。そのため、塔が通りの街路樹ぐらい多かったと言われています。

すりへって碑石なのかさえもわからないこの岩は、三国統一を成し遂げた文武王(ムンムワン)を賛えるためのものです。文武王は、韓半島を統一して唐を退けた統一新羅の英雄でした。そのため、この



碑石の前面には彼の業績と三国を治めた過程が、裏面には彼の遺言とそれに対する賛辞が記録されています。珍しいのは、この碑石は文武王の墓の前で発見されたのではないということです。慶州の数多くの王陵の中で、本来三国統一を成し遂げた文武王の墓はないためです。生前に日本の侵略を心配した文武王は、死んだら火葬して海に散骨するようにと遺言を残したそうです。龍に生まれ変わって国を守るという言葉と共にです。それで、慶州近郊の海にある大きい岩の島が、王陵と呼ばれています。王陵に根をおろすことが出来ない碑石の運命だったのでしょうか。18世紀末に初めて発掘されたこの碑石は、19世紀のはじめに行方不明になったそうです。皆さんがご覧になっている下段部は、1961年に発見されました。では、上段部は歴史の中に永遠に消えてしまったのでしょうか。驚くべきことに、2009年に慶州市内にある住宅広場で水道検査中に偶然発見されたそうです。長時間、風雨にさらされていたせいで、まだここではお見せできません。いつか、皆さんがまたこちらを訪れた際に、威厳を持って立つ文武王陵碑に会えることを期待しましょう。



[ガイド] この彫刻品は、緑釉寺四天王像伝です。緑色の釉薬を塗って焼いた、四天王像が彫られたレンガですね。ご存じの通り、四天王は仏教の守護神です。仏教の発祥地のインドでは、優雅な貴族の姿が彫刻されるのに反し、韓国や日本ではこのように怖い武士の姿が多いです。

[観覧客] ところでこの彫刻ですが、インドや東南アジアの雰囲気は漂っているようなのですが。

[ガイド] はい、この彫刻は韓国の一般的な四天王像に比べて確かにエキゾチックですね。統一新羅が外国と活発に交流する国際的な国だっただけに、このように外国風に彫刻品を作るのがまれなことではなかったんですよ。

[観覧客] そうですか。新羅の人がこういうエキゾチックな彫刻を作ったとは、彫刻家の技術は格別だったようですね。壊れずに全部あったらもっと素晴らしかったはずなのに。

[ガイド] そうでしょう。このレンガは約200点余りで、細かく割れた状態で発見されました。それで発掘に長い時間がかかったんです。例えば、今ご覧になっている下半身部分は1936年に発掘されたものですが、上半身の部分は何と70年

過ぎた後に発見されました。このように長時間かかって複数の発掘チームが保管しているのです、ここ慶州博物館にもこのように一部だけがあるのです。ですが、幸いにも 2009 年に特別展が開かれて、現在まで発掘された彫刻が組合わさった姿を見ることができるようになったんです。そして、中央にその写真があります。

[観覧客] あー、ここにありますがね。壊れてしまった彫刻でも非常に美しいですね。

[ガイド] そうです。今は壊れた姿ですが、当時は強固な新羅の守護神だったのです。長い戦争で苦痛を受けた時期、人々にとって仏教は大きな心のよりどころだったからですね。新羅の平安を守ってほしいという切実な希望を込めて作られたので、その美しさがさらに光るのでしょう。